

Editor's eye

・特集・

小児乾癬とその類症

編集担当 山本 俊幸

この数年、本誌の特集テーマに乾癬を取り上げている。今回は小児の乾癬とその類症を取り上げた。「Topics」には毛孔性紅色秕糠疹の本邦における現況を中心に、安田正人先生に解説いただいた。乾癬と比較すると遭遇する頻度は極端に低い疾患で、小児だけでなく成人例もあるが、診断自体もそれほど易しくはない。海外の論文をみるとIL-17の関与や、実際に抗IL-17製剤で軽快した症例報告も散見される。新規の遺伝子変異も本邦から報告されており、今後の展開に期待したい。

小児の乾癬は局面型や滴状乾癬が多い。話は少しそれるが、滴状乾癬は、従来考えられているほど一過性の経過はとらず、局面型と混在したり局面型へ移行するなど、慢性の経過をとることも少なくない。さて、実際に皮膚科医単独でみる機会は少ないのが小児の乾癬性関節炎である。小児例は非常にまれであるが、関節炎を早期に検出するのは皮膚科医の大事な役割である。「総説 1」では岡本奈美先生に皮膚科医にもわかるよう解説いただいた。膿疱性乾癬も重症例であるが、先般特集号があったので代わりに掌蹠膿疱症について、「総説 2」で黒木香奈先生らに執筆いただいた。乾癬と比較すると掌蹠膿疱症の小児例は極めて少なく、典型的な皮膚症状だけの症例よりも、関節炎を伴ったり、自己炎症症候群に近い可能性があるかと筆者は考えている。また、小児例とは少し離れるが、「総説オピニオン」では、乾癬と脂漏性皮膚炎を取り上げた。杉田和成先生と筆者とで乾癬と脂漏性皮膚炎について思うところを自由に述べたが、内容はまったく重ならなかった(もちろん事前に打ち合わせたわけではない)ので、対比してお読みいただければと思う。

「the case of the month」では乾癬治療に有効な武器である生物学的製剤療法の出口戦略が述べられている。投与開始して効いたというところまではよいが、その先どうするか、という視点から述べられている。臨床例では、膿疱性乾癬、BCG接種後の乾癬様皮疹、苔癬状秕糠疹、毛孔性紅色秕糠疹といった興味深い症例が並んでいる。小児の乾癬(およびその類症)は、日常診療ではあまりみかけないかもしれないが、ぜひお読みいただきたい。